

静岡県の後期古墳における脚付長頸壺

田村隆太郎

要旨 筆者は長泉町原分古墳の発掘調査報告書において、諸研究の成果と静岡市賤機山古墳や奈良県藤ノ木古墳など首長墓の状況を参考にして、脚付長頸壺の器種選択とその特別な扱われ方について、首長層における儀礼の特徴を示すものと評価した。このことに関連して、本稿では静岡県内の後期古墳（横穴墓を含む）における脚付長頸壺の器種選択と出土状況について、階層や地域、時期による様相を確認した。その結果、階層性との関係が認められる一方、地域による様相の差異や変遷も認められることから、地域性などの影響も考慮されることを評価した。

キーワード：墓室内土器 脚付長頸壺 器種選択 出土状況 階層性 地域性 葬送儀礼

1 はじめに

筆者は、静岡県駿東郡長泉町の原分古墳の発掘調査報告書（静文研 2008a）において、調査成果の検討に加えていただき、当古墳の埋葬と儀礼について執筆させていただいた（田村 2008）。その中で、石室内の土器群の中で 1 個体のみ認められた脚付長頸壺に注目し、他の器種が転倒した状態であったのに対して、立て置かれた可能性もあることを指摘した（図 4）。そして、葬送儀礼において他器種と異なる特別な存在として用いられ、その役割や意識が儀礼後の移動や追葬に伴う片付けを経ても保持された可能性を評価した。

しかし、原分古墳の脚付長頸壺には出土位置と高さの記録しかなく、立て置かれたかは不明確である。先述の評価は、転倒状態の多くの土器に比べて高い場所で見えられたことから、立て置かれていた可能性を示し、さらに、奈良県牧野古墳（広陵町教委 1987）や藤ノ木古墳（奈良橿考研 1990・1995）の器台や脚付長頸壺、静岡市賤機山古墳（静岡県教委 1953）の脚付長頸壺が特異的に立て置かれていることを参考にしたものである。

この 3 基の古墳や原分古墳は、いずれも首長層または小首長層に位置づけできる横穴式石室の古墳であり、豊富な副葬品、家形石棺を伴う点でも共通する。このことから、脚付長頸壺の扱われ方について、首長層に共有された儀礼に対する意識が表現されている可能性も考慮される。ただし、賤機山古墳では脚付長頸壺 2 個が他器種とは別に石棺前方に並立するのに対して、その他の 3 基の脚付長頸

壺は、石室の袖や側壁寄りの土器群の中に位置するという違いもある。各古墳で行われた儀礼には、階層的な序列だけではなく、時期や地域、被葬者または集団の様々な特性が強弱を含めて複雑に関わっていると推測される。

以上をふまえて、葬送儀礼の様相や意識を読み取るには極めて限定的であるが、脚付長頸壺の器種選択と出土状況（扱われ方）について、原分古墳や賤機山古墳が位置する静岡県内における様相を確認したい。

2 後期古墳の土器と儀礼をめぐる研究

対象資料をみる前に、後期古墳の土器による儀礼や葬送観念に関する諸研究、器種や出土位置について着目した諸研究の成果を概観する。

小林行雄氏は、石室内の土器に食物を調理して供する儀礼を示すものがあり、記紀の黄泉国におけるヨモツヘグイの記事との関連を指摘した（小林行 1949）。

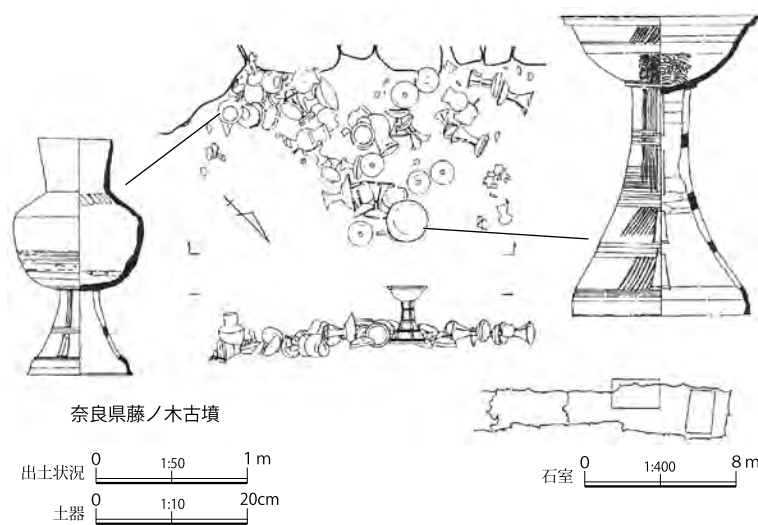


図 1 立て置かれた器台と脚付長頸壺

さらに、白石太一郎氏は後期古墳の各所で出土する土器の儀礼的性格について言及し、閉塞に伴う土器をコトドワタシと関連する黄泉国からの呪的逃亡、死霊を封じ込める呪的儀礼によるものと位置づけた（白石 1975）。亀田博氏は、木棺直葬における土器のあり方も分析し、棺内の土器に対してヨモツヘグイとの関連を評価している（亀田 1977）。土生田純之氏は、石室内の土器をめぐる様相について、新たな観念に基づく葬送儀礼の成立によるものとし、さらに畿内型石室の成立や伝播との関連性を指摘して、畿内政権が関わる政治的背景による出来事と評価した（土生田 1998）。

その後、寺前直人氏は、ヨモツヘグイとの関連は一部の炊飯具形土器を伴う古墳・古墳群に限定されたものであり、大型古墳をはじめとする多くは、従来の饗宴・共飲共食儀礼の器種構成が維持されていることを指摘した（寺前 2006・2012）。森本徹氏は、石室内における土器の出土位置、とくに被葬者からの距離に注目し、多くは飲食儀礼に用いた土器を石室内に持ち込んだものであると推測している（森本 2007）。また、古屋紀之氏は、器種組成とともに正位か否かといった出土状態に着目し、藤ノ木古墳などについては食物供献儀礼に用いた土器を石室内に持ち込んだものと評価している（古屋 2011）。このように、石室内の土器群に対する評価と儀礼の様相について、多様な視点による分析と指摘が行われ、新たな観念（ヨモツヘグイ）の実態と歴史的意義について探求させられるものとなっている。

後期古墳の特に墓室内から出土する土器の器種は、多くの研究で着目されている要素である。白澤崇氏は、器種組成をA～D類に分類し、主に群集墳・横穴群における変遷や階層秩序との関連について分析している。その結果、多くの器種を伴う組成が上位階層に伴うことを指摘するほか、注ぐ機能を重視した甕の存在が注目されるとし、壺や瓶類はその補完関係にあると評価している（白澤 1998a・1998b）。

藤原学氏は、長頸壺や器台、高坏などの長頸化や長脚化について、横穴式石室の導入と関連したものと評価している。さらに、賤機山古墳において指摘できる脚付長頸壺の特別な扱われ方について、石室内における新たな意識の表現として注目した（藤原 1985）。寺前直人氏は、乙訓地域の後期古墳出土土器の様相を分析し、脚付器種の有無が階層秩序と対応し、次いで甕も同様の傾向にある可能性を指摘した。さらに、広域での格付けに基づいて階層に応じた脚付器種の選択が

なされたと評価する一方、地域によって異なる特徴（須恵器の偏重など）もあり、地域ごとの分析と比較の必要性を示している（寺前 2005）。三原翔吾氏は、主に白澤氏や寺前氏の研究成果をふまえながら、若狭・越前地域の中・後期古墳出土土器について分析している。その結果、器台は階層との関係が強く、高坏や脚付壺はやや鈍いなどの傾向を把握したうえで、一定の階層秩序に応じた器種選択があったことを評価した。また、上位階層の儀礼が下位へ広がる変遷が認められることを指摘している（三原 2013）。

土器の出土位置についても、分析要素として認めることができる。小林孝秀氏は、上野地域の後期古墳における葬送儀礼について分析し、6世紀後半から7世紀初頭を移行期として、土器供献の場が石室内から前庭部に変化していることを明らかにした。さらに、首長墓における前庭部儀礼の変化と群集墳における埋葬空間確保に関連した石室内土器供献の省略という2つの動きとその連動を評価した（小林孝 2005）。柏木善治氏は、相模・南武蔵地域の横穴墓における様相を分析する中で、7世紀における玄室と墓前域における土器の器種組成等の変遷を把握している（柏木 2013）。

3 静岡県の脚付長頸壺出土後期古墳の諸例

脚付長頸壺の出土古墳（横穴墓を含む）とその出土状況について、静岡県内における状況を確認する。

地域は、図2のとおり区分する。時期（註1）は、脚付長頸壺が現われる時期（遠江Ⅱ期頃）から原分古墳の時期（遠江Ⅲ期末葉頃）までを対象とする。

なお、脚付長頸壺は遠江Ⅲ期末葉より後にも確認できるが、脚部は短小化して台状になり、また、3個体以上が出土する例（註2）が多くなるなど、扱われ方などにも大きな変化が予測される。さらに、横穴式石室や家形石棺の変容が認められる時期にもあたる（静岡県考古学会 2003）ことから、こうした終末期古墳における様相については、本稿とは別に評価することとしたい（註3）。

（1）伊豆・駿河

賤機山古墳と原分古墳（図3・4） 静岡市賤機山古墳は駿河の静清地域、長泉町原分古墳は駿河の駿東地域に位置する。

賤機山古墳は、遠江Ⅲ期中葉頃の直径約32mの円墳である。大型の両袖の横穴式石室に家形石棺を伴い、金銅装馬具や装飾付大刀などの副葬品もあることから、地域の首長墓として評価することができる。脚付長頸

壺は、玄室右袖（註4）付近に雑然と積まれた土器群とは別に、2個体が石棺前方に並立されていたと報告されている。

一方の原分古墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径約17mの円墳である。無袖の横穴式石室を埋葬施設とするが、大型の石室に家形石棺を伴い、金銅装馬具や装飾付大刀などの副葬品の特徴から、報告書では小首長層に位置づけられている。概ね3回の埋葬行為が復元でき、土器群も石室の奥寄り右隅、中央部、前寄り左側の3ヶ所に認められる。脚付長頸壺は、初葬に伴うと判断できる前寄り左側の土器群の最奥に位置する。先述のとおり出土状況は明確でないが、筆者は出土経緯などから立て置かれていた可能性を指摘した。

静清地域の諸例（図3） 賤機山古墳のある静清地域では、このほかに静岡市駿河丸山古墳（静岡考古館1962）と静岡市楠ヶ沢3号墳（静岡市教委1986）から脚付長頸壺が出土している。また、静岡市神明山4号墳（清水市教委2002）からも、脚付壺の出土が認められている。

駿河丸山古墳は、遠江Ⅲ期後葉頃の一辺20m程の方墳である。家形石棺と箱形石棺を伴う両袖の横穴式石室を埋葬施設とし、金銅装馬具や装飾付大刀などの

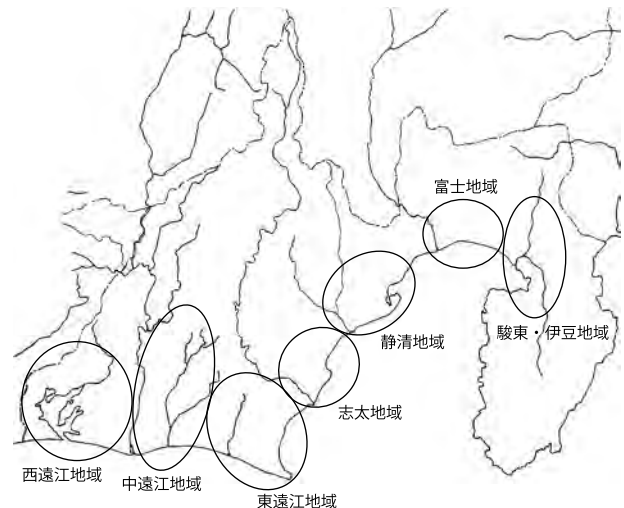


図2 対象資料の地域

副葬品がある。楠ヶ沢3号墳は、遠江Ⅲ期後葉～末葉の一辺15m程の方墳である。攪乱が著しく副葬品などの様相は明確でないが、擬似両袖の横穴式石室に箱形石棺を伴うほか、鉄釘が出土している。神明山4号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径18m程の円墳である。擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とし、金銅装馬具や装飾付大刀、挂甲などの副葬品をもつ。それぞれに異なる特徴を持つが、いずれも首長墓または上位階層として位置づけできる古墳である。

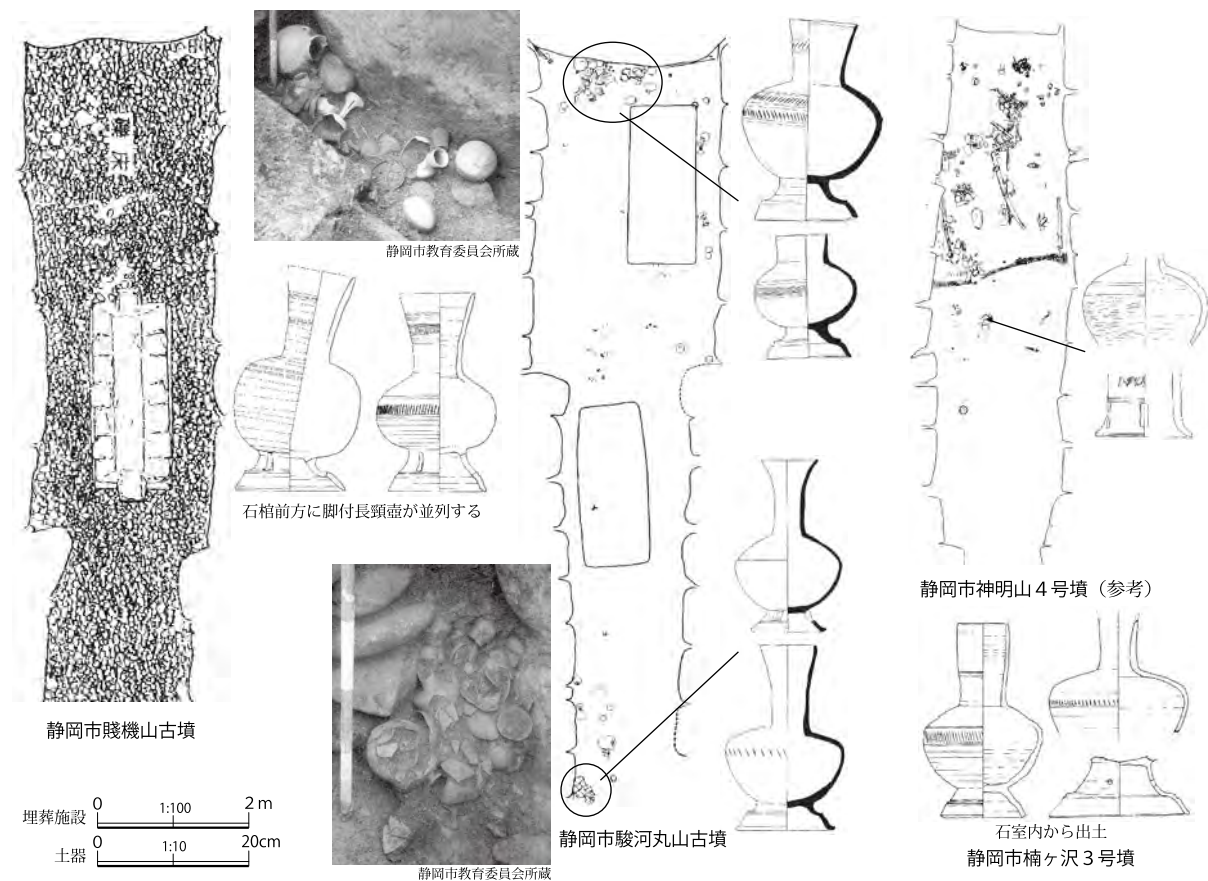


図3 賤機山古墳と静清地域の諸例

脚付長頸壺について、駿河丸山古墳では石室奥寄りの土器群に短頸のものを含めて2個体、追葬による可能性が指摘できる前寄りの土器群に2個体が認められる。しかし、いずれも土器群中にまぎれており、立て置かれた状況は認められない。神明山4号墳では、玄室中央付近で単独的に出土しているが、壊れた状態にある。楠ヶ沢3号墳は攪乱のために不明である。

なお、一辺28m程の方墳で鏡や馬具の副葬が認められる静岡市佐渡山2号墳（静岡市教委1984）では、破片の状態であるが子持壺付の器台が認められる。

富士地域と駿東・伊豆地域の諸例（図4） 駿河東半から伊豆にかけての諸地域では、原分古墳のほかにも富士市谷津原6号墳（静文研2001）、沼津市清水柳北3号墳（沼津市教委1990）、三島市夏梅木9号墳（三島市教委2000）に脚付長頸壺の出土が認められる。

谷津原6号墳は、富士地域最西域の富士川西岸に位置する。遠江Ⅲ期中葉頃の直径17m程の円墳であり、無袖の横穴式石室を埋葬施設とする。群集墳中の古墳であり、墳丘・石室規模や出土土器の器種組成からは比較的上位の階層にあるという評価はできるが、装飾

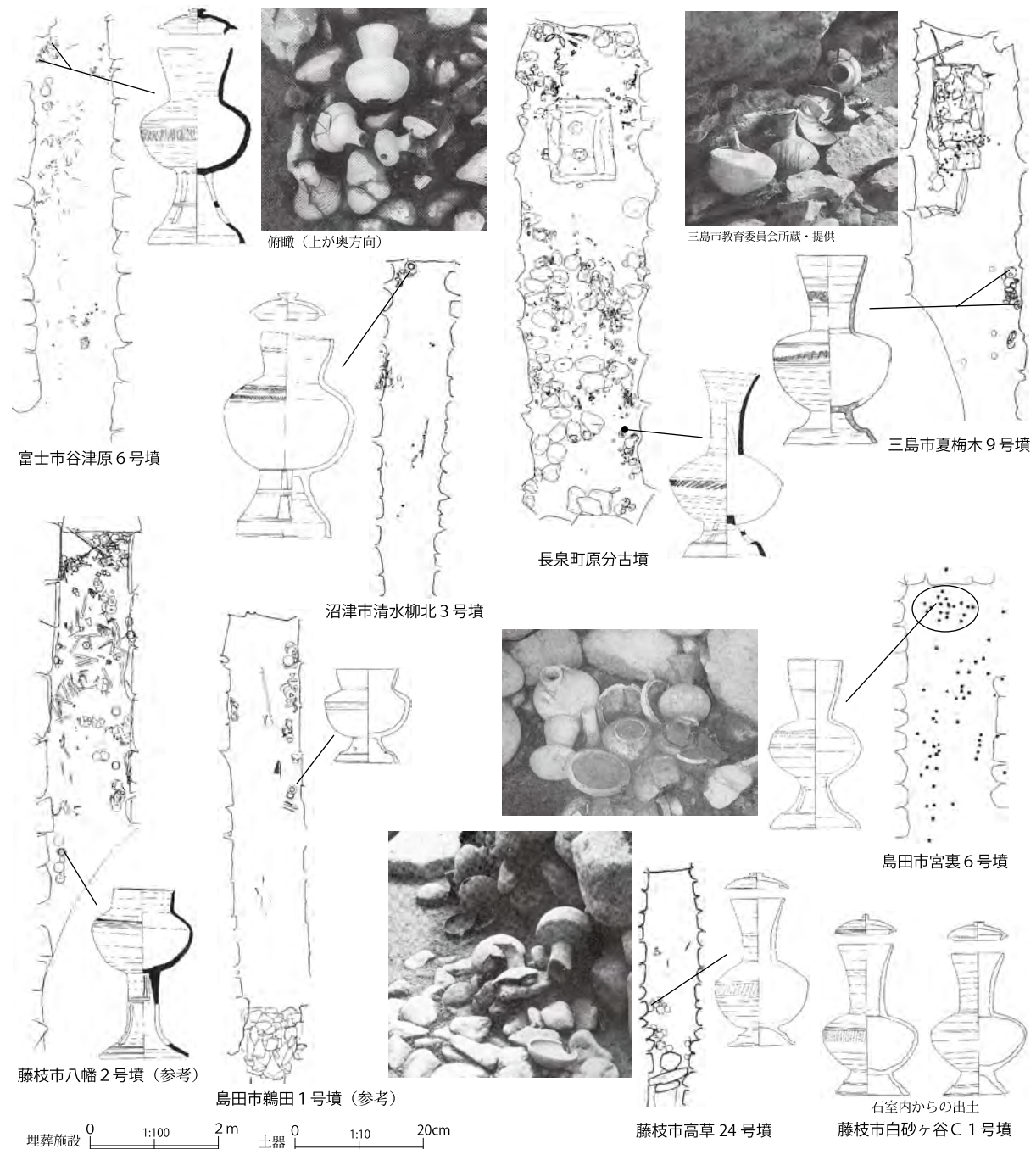


図4 原分古墳と富士地域および駿東・伊豆地域、志太地域の諸例

付大刀の出土は1号墳、馬具の出土は7号墳である。6号墳の脚付長頸壺は、石室奥寄りの土器群中にあり、脚付甕とともに崩れた状態で出土している。しかし、石室の残存状況や他の遺物の出土状況から、後世に押し潰された可能性が推測され、本来は立て置かれていた可能性も推測できる。

駿東地域の清水柳北3号墳は、遠江Ⅲ期中葉頃の直径8m程の円墳であり、無袖の横穴式石室を埋葬施設とする。土器以外の副葬品は鉄製武器と玉類に限られる。脚付長頸壺は、石室奥寄りにおいて単独で立て置かれた状態で出土している。

伊豆の夏梅木9号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径11m程の円墳であり、箱形石棺を伴う無袖の横穴式石室を埋葬施設とする。谷津原6号墳と同様に、比較的大きな墳丘・石室を伴うものの、副葬品は決して豊富とはいえず、群集墳中において比較的上位の階層にあるという評価に留まる。脚付長頸壺は、石室前寄り左側の土器群において、脚部と壺部分が別々に出土している。壺部分は土器群の最奥で正位に置かれているが、脚部は斜めになった状態である。また、壺の隣のフラスコ瓶も正位で出土していることから、特別目立つように置かれたという評価は難しい。

志太地域の諸例（図4） 島田市宮裏6号墳（島田市教委2010）や藤枝市高草24号墳（藤枝市教委他1981）、白砂ヶ谷C1号墳（藤枝市教委他1980）に脚付長頸壺の出土が認められる。いずれも群集墳の中に位置する。

宮裏6号墳は、遠江Ⅲ期後葉頃の直径12m程の円墳である。無袖の横穴式石室を埋葬施設とし、鉄製馬具などを副葬している。脚付長頸壺は、石室奥寄りの土器群の中にあり、横倒しにされた状態が認められる。

高草24号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径6mの円墳であり、擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とする。副葬品は少ない。石室前寄りの土器群の中において、短い脚の長頸壺が倒れた状態で出土している。

白砂ヶ谷C1号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径13m程の円墳である。擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とし、馬具などの副葬が認められる。石室内から短い脚の長頸壺が2個体出土しているが、詳細な状態については不明である。

なお、藤枝市八幡2号墳（藤枝市2007）では、2段透かしの長脚をもつ短頸壺が認められ、石室前寄りで坏蓋や提瓶とともに並び、さらに土師器小型壺を入れた状態が確認されている。多くの土器や副葬品が出

土しており、遠江Ⅲ期前～中葉の上位の階層に位置付けできる古墳である。また、島田市鶴田1号墳（島田市教委1978）では、石室左側において転倒した高坏群とは別に、器高の低い脚付短頸壺が正位で出土している。無袖の横穴式石室を埋葬施設とし、遠江Ⅲ期前葉の横穴式石室導入期の事例となるが、土器以外の副葬品は鉄製武器と玉類に限られる。

（2）遠江

東遠江地域の諸例（図5） 遠江の東寄りの地域では、主に横穴群が展開しており、横穴式石室および木室の古墳は少数に限られる。

北西の内陸域（掛川市街地周辺）では、遠江Ⅱ期頃の掛川市山麓山横穴墓（掛川市2000）、遠江Ⅲ期前葉頃の掛川市宇洞ヶ谷横穴墓（静岡県教委1971）、遠江Ⅲ期中葉頃の掛川市堀ノ内13号墳（掛川市1997・2000）、掛川市茶屋辻A13号横穴墓（掛川市教委2003）に脚付長頸壺の出土が認められる。前3基は墳丘や墓室の規模、金銅装馬具や装飾付大刀といった副葬品から首長墓に位置づけでき、茶屋辻A13号横穴墓も横穴群の中では比較的上位の階層にあると評価できる。

山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓の脚付長頸壺については、出土状況の詳細は不明である。堀ノ内13号墳では、横穴式木室の奥寄りに土器群が認められ、出土状況図を見る限り、脚付長頸壺は倒れた状態であるが、大型の脚付甕は立て置かれていたことが確認できる。茶屋辻A13号横穴墓では、墓室中央付近で脚付長頸壺が横倒しになっている。

南東の海沿いの地域では、牧之原市稲荷山古墳（静岡県教委1966）、牧之原市小堤山2号横穴墓（相良町教委1999）、菊川市宇藤A9号横穴墓（菊川町教委1996）、掛川市毛森山欠下峠B1号横穴墓（大東町教委2004）において、頸部のやや短い脚付壺が出土しており、前3基では横倒しの状態が確認できる。稲荷山古墳は数少ない横穴式石室の古墳ではあるが、直径12m程の円墳であり、上位の階層として評価できる副葬品も認められない。その他の横穴墓についても、上位の階層に位置づけできる要素は認め難い。

なお、遠江Ⅲ期前～中葉頃の菊川市下本所10号横穴墓（静岡県教委1968）からは、脚付短頸壺が出土している。横穴群の中では比較的多くの副葬品をもつが、際立った存在ではない。また、内陸域に位置する掛川市本村A1号横穴墓（静岡県教委1968）からは、長脚の脚付短頸壺が横倒しの状態で出土している。横

穴群の中で最も古い横穴墓であるが、規模は4号横穴墓が最大である。

中遠江地域の諸例（図6） 横穴群が展開する東遠江と群集墳が展開する西遠江との境界域にあたり、東西の傾向を伴った小地域が分布する。

東寄りの森町・袋井市域について、古墳では、遠江Ⅲ期前～中葉頃の袋井市山本山4号墳（袋井市教委1978）、遠江Ⅲ期中葉頃の森町林5号墳（静文研2008b）や袋井市北山2号墳（浅羽町教委1987）、遠江Ⅲ期後葉頃の森町院内3号墳（森町1998）や袋井市団子塚6号墳第1主体部（袋井市教委1992）のほか、近年発掘調査された袋井市団子塚H1号墳第1・2主体部（袋井市教委2013）に脚付長頸壺の出土が認め

られる。

これら出土古墳の階層的位置に関して、院内3号墳は装飾付大刀などを副葬する両袖の横穴式石室であるが、直径10m程の円墳である。林5号墳は横穴式木室を埋葬施設とする直径15m程の円墳であり、単独立地の古墳ではあるが、金銅装馬具や装飾付大刀の副葬はない。その他の古墳も、これらより上位の階層に評価できる要素はない。なお、遠江Ⅲ期前葉頃の横穴式石室導入期の古墳であり、規模や副葬品から首長墓に位置づけできる袋井市大門大塚古墳（袋井市教委1987）からは、長脚の脚付短頸壺や器台が出土している。

脚付長頸壺について、山本山4号墳では石室奥寄り左側、林5号墳では墓室左前裾部、団子塚H1号墳第

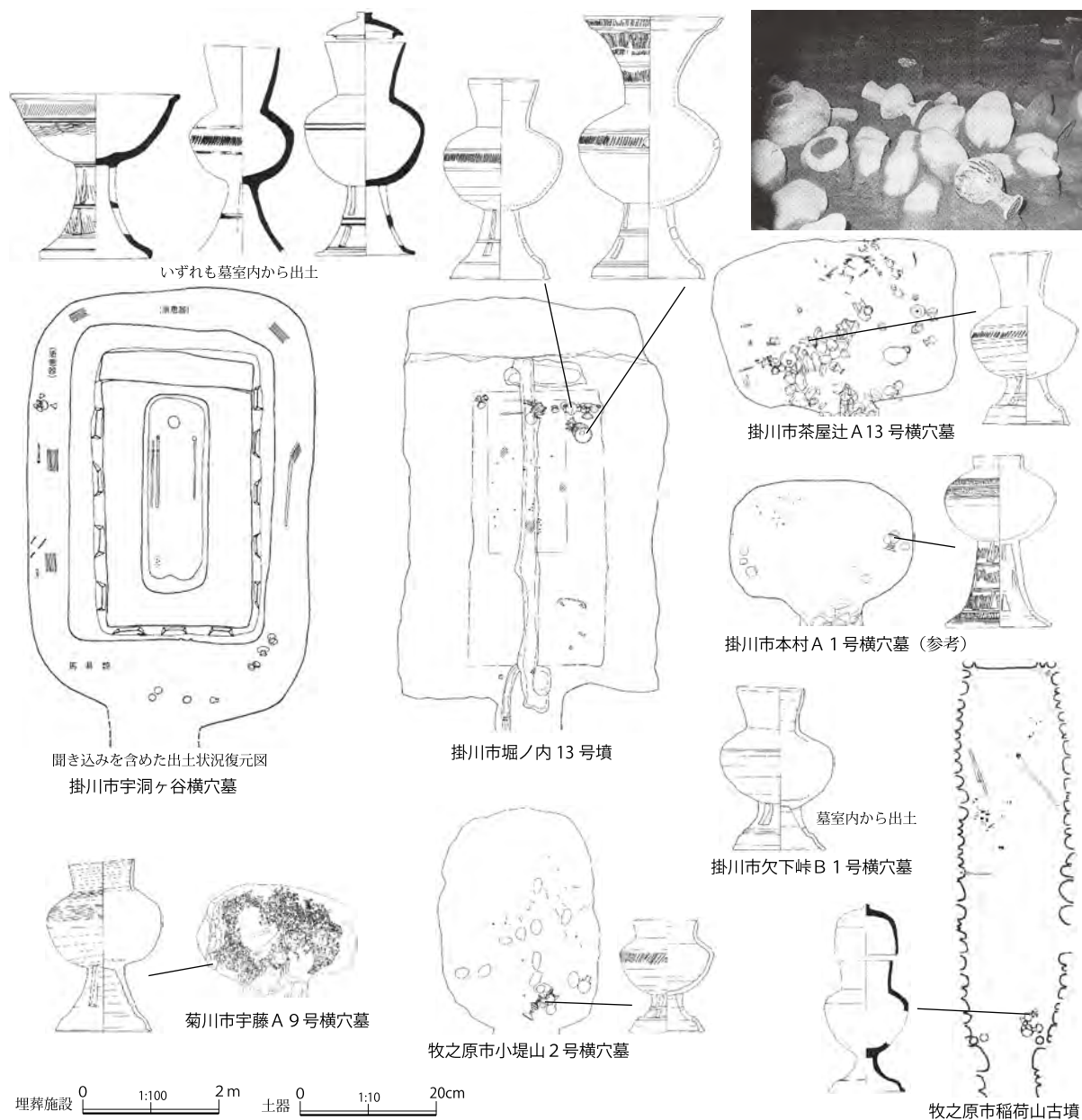


図5 東遠江地域の諸例

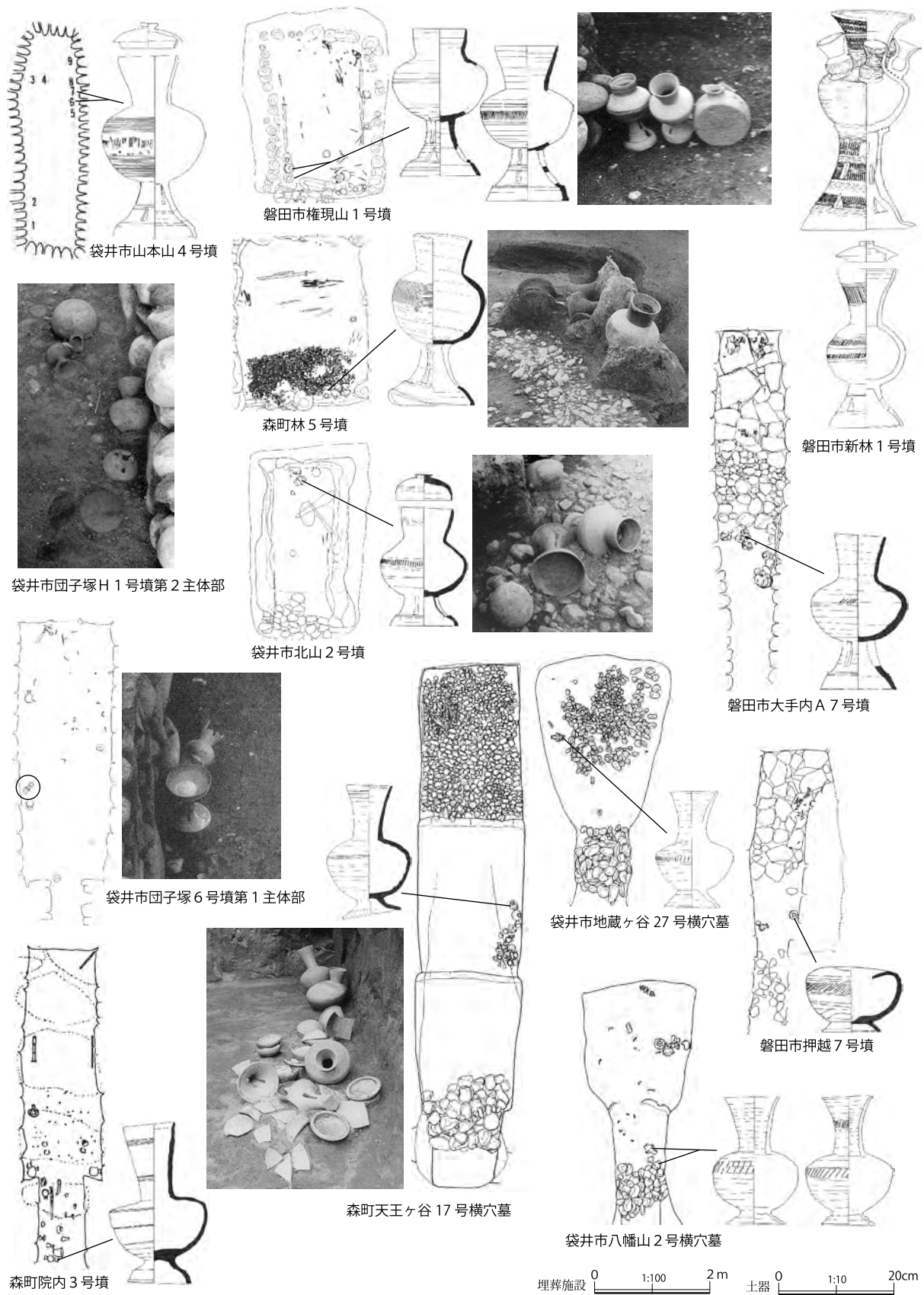


図6 中遠江地域の諸例

2 主体部では石室前寄り左側において、横倒し状態の多い土器群の中で立て置かれた状況が認められる。しかし、北山 2 号墳では墓室奥寄り、院内 3 号墳では羨道前寄り、団子塚 6 号墳第 1 主体部では石室右側において倒れた状態の出土状況が報告されている。なお、大門大塚古墳の器台等については、詳細な状態が把握できない。

横穴墓では、遠江Ⅲ期末葉以降の森町天王ヶ谷 17 号横穴墓（静岡県埋文 2012）、袋井市地藏ヶ谷 27 号横穴墓（袋井市教委 2004）、袋井市八幡山 2 号横穴墓（袋井市教委 1997）に脚付長頸壺の出土が認められる。

天王ヶ谷 17 号横穴墓は、土器と鉄製武器の副葬に限られるが、横穴群の中では古い時期にあり、墓室規模が大きい。墓室前寄り左側の土器群の最奥に短い脚の長頸壺があり、平瓶や高坏とともに立て並べられている。他の 2 基は、横穴群の中でも決して上位の階層にあるとはいえない。いずれの脚付長頸壺も、単独的に横倒しの状態で出土している。

西寄りの磐田市域では、横穴墓がほとんど認められない。遠江Ⅱ期頃の甕塚古墳（磐田市 1992）、遠江Ⅲ期中葉頃の権現山 1 号墳（静岡県教委 2001）、遠江Ⅲ期後葉頃の新林 1 号墳（豊岡村 1993）、遠江Ⅲ期末葉以降の押越 7 号墳（豊岡村教委 1983）、大手内 A 7 号墳（豊岡村教委 2000）に脚付長頸壺の出土を認めることができる。

甕塚古墳は、直径 26 m の円墳である。畿内系石室の特徴をもつ片袖の横穴式石室を埋葬施設とし、金銅装馬具や装飾付大刀など非常に豊富な副葬品があることから、首長墓に位置づけできる。石室内の土器も多く、脚付長頸壺の他に大型の脚付短頸壺や器台が認められる（註 5）。権現山 1 号墳は、墳長 18 m 程の前方後円墳である。横穴式木室を埋葬施設とし、金銅装馬具など比較的豊富な副葬品をもつ。2 個体の脚付長頸壺と提瓶が墓室前寄り右側に立て並べられている。

その他の 3 基は、磐田市域の中でも北部に位置する。新林 1 号墳は、直径 15 m 程の円墳であり、片袖の横穴式石室を埋葬施設とするが、副葬品の全容は不明である。脚付長頸壺のほかに小型壺付きの大型脚付長頸壺も出土しているが、出土状況は不明である。押越 7 号墳と大手内 A 7 号墳は、群集墳中の円墳であり、土器以外の副葬品は鉄製武器と玉類等に限られる。押越 7 号墳では、短い脚の長頸壺が単独で石室前寄りに立て置かれている。大手内 A 7 号墳では、玄室前寄りに単独で脚付長頸壺が割れた状態で出土している。

なお、磐田市梵天 18 号墳（磐田市教委 2003）や磐田市寺谷坂上 23 号墳（磐田市教委 1989）では、周溝や墓道において脚付長頸壺が出土している。いずれも、遠江Ⅲ期末葉頃の群集墳中の古墳である。

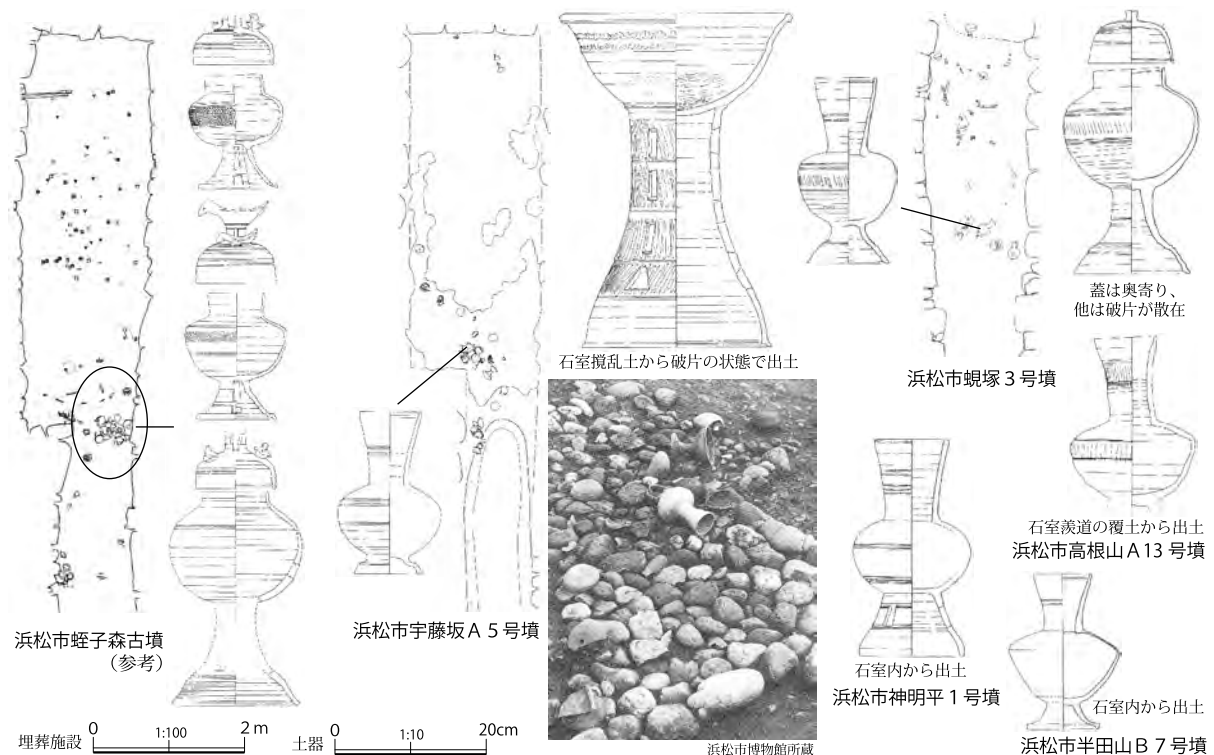


図 7 西遠江地域の諸例

西遠江地域の諸例（図 7） 横穴式石室および木室の古墳が多く分布する地域である。しかし、墓室内から脚付長頸壺が出土している古墳は、遠江Ⅲ期後葉頃の浜松市宇藤坂 A 5 号墳（浜松市文協 1998）、浜松市半田山 B 7 号墳（浜松市教委 1971）、遠江Ⅲ期末葉頃の浜松市蜷塚 3 号墳（浜松市教委 1985）、浜松市神明平 1 号墳（川江 1997）、浜松市高根山 A 13 号墳（浜北市教委 1995）など、決して多くはない。一方、半田山古墳群や下滝古墳群、地蔵平古墳群などの群集墳において、周溝や前溝から脚付長頸壺などが出土する例が多く認められる（浜松市教委 1988、浜松市文協 1992・1997）。

宇藤坂 A 5 号墳は、直径 18 m 程の円墳であり、片袖の横穴式石室を埋葬施設とする。攪乱の影響もあって、武器・馬具などの副葬品は目立たないが、脚付長頸壺のほかに特殊扁壺や器台などを含む豊富な土器群が認められる。並列する 4 号墳からは金銅装馬具の副葬もあり、上位階層の系列として位置づけることもできる。脚付長頸壺は、玄門付近の土器群の中で横倒しの状態で出土している。器台は、攪乱土中からの破片の出土である。

蜷塚 3 号墳は、擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とする。副葬品は武器類だけであるが、並列する 1 号墳からは金銅装馬具などの副葬品が出土しており、比較的上位の階層にある古墳群として評価することもできる。3 号墳の脚付長頸壺は、玄室前寄りで横倒しの状態で出土している。また、脚付短頸壺が墓道を含めて散在した破片の状態で出土し、蓋が玄室奥寄り出土している。

その他の 3 基については、脚付長頸壺の出土状況に関する詳細は不明である。半田山 B 7 号墳は、直径 12 m 程の円墳であり、擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とする。土器以外の副葬品は鉄製武器、農工具と玉類に限られる。神明平 1 号墳は、直径 13 m 程の円墳であるが、片袖の横穴式石室を埋葬施設とし、装飾付大刀などを副葬品とする。高根山 A 13 号墳も片袖の横穴式石室を埋葬施設とする。ただし、副葬品の様相は不明である。

なお、単独的に立地する直径 20 m 超の円墳である浜松市蛭子森古墳（浜松市教委 1995）からは、水鳥付蓋を伴う脚付短頸壺が出土している。片袖の横穴式石室を伴い、馬具や武器などの副葬品も比較的豊富である。脚付短頸壺は、玄門付近の土器群中に混在した状態で出土している。

4 静岡県の後期古墳と脚付長頸壺をめぐる様相

静岡県内の脚付長頸壺が出土した後期古墳をあげてきたが、出土古墳の特徴も出土状況も多様であることがわかる。また、埋葬や儀礼の状況だけではなく、後世の攪乱や調査報告に関する資料的な問題も影響していることを考慮すると、その評価は一層難しい状況にあるといえる。

しかし、個別的に異なる状況であっても、古墳時代の葬送をめぐる行為の痕跡として、何らかの意識が反映されているものと考ええる。また、わずかでも傾向が見出せれば、その可能性を評価しておきたい。そこで、諸研究で検討・指摘されてきた出土古墳の階層的位置、そして賤機山古墳や原分古墳で注目した出土状況に関する傾向について確認する。

（1）出土古墳の階層的位置

器台（佐渡山 2 号墳、宇洞ヶ谷横穴墓、大門大塚古墳、蜷塚古墳、宇藤坂 A5 号墳）や大型脚付甕（堀ノ内 13 号墳）、さらに長脚の短頸壺（八幡 2 号墳、下本所 10 号横穴墓、蛭子森古墳）については、上位階層への傾向が比較的明確であり、既に諸研究（寺前 2005 など）で指摘されている階層秩序に対応した脚付器種の選択を評価することができる。

これに対して、脚付長頸壺についてみると、上位階層にある古墳が目立つものの、そのように評価できない古墳も認められることがわかる。しかし、次のように地域・小地域ごとにみると、単に器台などに比べて上位階層との関係性が弱いというだけではなく、地域ごとに異なる様相や変遷として階層性との関係性を評価することができる。

静清地域では、賤機山古墳をはじめとして首長墓・小首長墓に出土がたよっている。また、東遠江地域の北西内陸域（宇洞ヶ谷横穴墓など）や中遠江地域の南西域にあたる磐田市域南部（蜷塚古墳・権現山 1 号墳）においても同様であり、器台などに続く存在として上位階層に用いられた可能性が指摘できる。

その一方で、富士地域、駿東・伊豆地域や中遠江地域の南東域にあたる袋井市域では、早い段階から群集墳にも脚付長頸壺が用いられている。対象資料がⅢ期後葉以降にかたよるが、志太地域や西遠江地域も同様の状況が認められる。もちろん、群集墳の中でも有力層に位置づけできる古墳も少なくないが、限定的とまでは評価できない。

さらに、横穴群が展開する東遠江地域の中において

も、海沿いの諸地域では内陸域とは全く異なる状況が指摘できる。また、富士地域の中央域（富士・愛鷹山南麓）では、階層に関わらず脚付長頸壺の出土が認められていない。これらの状況も考慮するならば、少なくとも有力層における脚付長頸壺の器種選択が広く踏襲されていたとは評価し難い。脚付長頸壺が上位階層に用いられるものであったかは、地域・小地域による差異を伴う状況であった可能性が指摘できる。

（２）脚付長頸壺の出土状況

脚付長頸壺の出土位置については、多くが墓室の前寄りからの出土であったが、一部に奥寄りからの出土も認められる。清水柳北3号墳、谷津原6号墳、駿河丸山古墳、宮裏6号墳、堀ノ内13号墳、山本山4号墳、北山2号墳が該当するが、地域的なかたよりは認められず、階層的位置との関係も評価し難い。あえて指摘するならば、遠江Ⅲ期後葉以前に認められるという状況にある。ただし、多くの場合は他器種を含む土器群の中に脚付長頸壺があることから、脚付長頸壺に特化した傾向ではなく、土器群全般の配置や片付けの方法に起因するものと評価される。また、西遠江地域や中遠江地域の磐田市域では、遠江Ⅲ期後葉以降を中心として墓室外からの出土が多く認められるが、このことについても、土器群全般の配置や片付け、または後世の影響における傾向である可能性が考慮される。

脚付長頸壺の出土状態（扱われ方）については、攪乱されたり割れ潰れたりしているものもあり、また、後世になってから倒れるなどの可能性も考慮しなければいけない。しかし、立て置かれた事例が一定数認められ、その一方で、横倒しにされた可能性が評価できる事例（駿河丸山古墳、宮浦6号墳など）もある。

遠江Ⅲ期中葉以前には立て置かれた事例（清水柳北3号墳、賤機山古墳、山本山4号墳、林5号墳、権現山1号墳など）が比較的多く、その後は横倒しの状態が多くなるという傾向が認められる。ただし、東遠江地域では古い段階から立て置かれた状態を認めることができず、その一方で、中遠江地域では新しい時期にも立て置かれた事例（天王ヶ谷17号横穴墓、押越7号墳）が認められる。さらに、立て置かれた事例の中においても、出土位置やその他の土器との位置関係などを含めると、全てが同様であるとはいえない。例えば、賤機山古墳のように単独で石室前方に立て置く方法については、広く踏襲されていたとは評価し難く、むしろ特徴的ともいえる。

このように、脚付長頸壺の扱われ方に関しては、立

て置かれる傾向から他器種と同様に倒されるようになるという変遷の可能性が評価できるとともに、地域による変遷の差異や個別的な変異の可能性も指摘できる。原分古墳について再考すると、時期的な傾向をみれば、脚付長頸壺が横倒しであった可能性も考慮される。しかし、地域的な変遷の差異とともに、金銅装馬具に代表される豊富な副葬品に加えて家形石棺をもつという数少ない階層的位置にあることから、その特性によって脚付長頸壺を立て置く方法が採られた可能性も否定できないと考える。

５ まとめ

先に筆者は、原分古墳における脚付長頸壺の存在について、畿内を中心とした新たな墓制（横穴式石室）の出現と関係するように現われる器種であり、脚付器種が階層秩序に対応して選択される傾向にあるという諸研究の成果を参考にし、さらに、賤機山古墳や藤ノ木古墳、牧野古墳における立て置かれた出土状況に特別な扱われ方の可能性を評価し、これらを古墳時代後期の首長墓における葬送儀礼の特徴を示すものとして位置づけた（田村2008）。

しかし、静岡県内における脚付長頸壺の状況をみると、より広い階層に展開する様相が確認できる。たしかに、脚付長頸壺が上位階層にかたよって選択される傾向は認められ、また、特別に立て置く方法が採られる場合も少なからずあることは指摘できる。しかし、いずれも地域などによって差異があり、地域性や変遷、各古墳の特性が影響していることも考慮される。したがって、賤機山古墳などの特別な脚付長頸壺の扱われ方については、地域をこえた首長層における比較によって位置づけることが有効であると考えますが、単なる階層的な上下だけではなく、それぞれの地域性や個々の特性を考慮した検討が求められる。

本稿で評価した地域性については、後期古墳の儀礼に関する地域性ということになるが、その具体的な理解が検討課題となる。後・終末期古墳に関する地域性については、静岡県内でも既に横穴式石室や横穴墓に関する分析（静岡県考古学会2001・2003）があり、また、須恵器生産における地域差とも関連する可能性が考慮される。さらに、儀礼に伴う土器群の中には、新出的で階層性との関連が強いと評価できる脚付器種だけではなく、多様な器種がある。伝統的な要素、階層に関わらない意識などが比較的強く表現されたものがあれば、それらを含めた検討は重要であると考えられる。

註

- 1 本稿では、遠江須恵器編年（鈴木 2004）によって時期を示すこととする。遠江Ⅱ期は陶邑編年 MT15 型式併行期（6 世紀前葉頃）、遠江Ⅲ期前葉は陶邑編年 TK10 型式併行期（6 世紀中葉頃）、遠江Ⅲ期中葉は陶邑編年 TK43 型式併行期（6 世紀後葉頃）、遠江Ⅲ期後葉は陶邑編年 TK209 型式併行期・飛鳥編年Ⅰ期の古相（6 世紀末葉～7 世紀初頭頃）、遠江Ⅲ期末葉は陶邑編年 TK209 型式併行期・飛鳥編年Ⅰ期の新相（7 世紀前葉頃）に概ねあたるものとする。
- 2 藤枝市白砂ヶ谷 D10 号墳（藤枝市教委他 1980）、森町円明寺 3 号墳（森町 1998）、袋井市地藏ヶ谷 22 号横穴墓（袋井市教委 2004）など、墓室から 3 個体以上の脚付長頸壺が出土する終末期の古墳を散見することができる。
- 3 本稿では、対象古墳を総じて後期古墳と称しているが、正確には古墳時代後期から終末期に至るまでの範囲を対象としている。これは、本文にあるとおり、当該地域における古墳の変遷から対象時期を設定したうえで、後期古墳の様相を主体に検討することとしたためである。
- 4 横穴系埋葬施設の方角について、横口側を前、反対側を奥とし、左右は奥から前を向いたときの方角とする。
- 5 磐田市教育委員会主催の平成 24 年度文化財課企画展「黄泉の世界 - 磐田の後期古墳」において、出土土器が石室模型内に配置された状態で展示された。それによれば、器台は石室左側の埴輪棺の前方、脚付短頸壺は石室右側の土器群の中央、脚付長頸壺は同じ土器群の奥寄りに位置する。

引用・参考文献

- 浅羽町教育委員会 1987 『北山遺跡』
- 磐田市 1992 『磐田市史』史料編 1 考古・古代・中世
- 磐田市教育委員会 1989 『昭和 63 年度坂上遺跡・藤上原 3 遺跡発掘調査報告書』
- 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 掛川市 1997 『掛川市史』上巻
- 2000 『掛川市史』資料編古代・中世
- 掛川市教育委員会 2003 『東名掛川 I・C 周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』

- 柏木善治 2013 「古墳時代後・終末期の喪葬観念 - 相模・南武蔵地域における横穴墓の様相を中心として -」『考古学研究』第 60 巻第 1 号 考古学研究会
- 亀田 博 1977 「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第 23 巻第 4 号 考古学研究会
- 川江秀孝 1997 「神明平 1 号墳発掘調査報告」『浜松市博物館報Ⅸ』
- 菊川町教育委員会 1996 『宇藤遺跡群』
- 広陵町教育委員会 1987 『史跡牧野古墳』
- 小林孝秀 2005 「上野における横穴式石室葬送儀礼の変化 - 群集墳の事例を中心として -」『古文文化談叢』第 52 集 九州古文化研究会
- 小林行雄 1949 「黄泉戸喫」『考古学集刊』第 2 冊 東京考古学会
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 2001 『富士川 SA 関連遺跡』
- 2008a 『原分古墳』
- 2008b 『森町円田丘陵の古墳群』
- 財団法人浜松市文化協会
- 1992 『有玉土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下巻』
- 1997 『下滝遺跡群』
- 1998 『宇藤坂古墳群』
- 相良町教育委員会 1999 『小堤山横穴群』
- 静岡県教育委員会
- 1953 『静岡賤機山古墳』
- 1966 『静岡県埋蔵文化財要覧Ⅰ』
- 1968 『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 1971 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』
- 2001 『静岡県の前方後円墳 - 個別報告編 - 』
- 静岡県考古学会 2001 『東海の横穴墓』
- 2003 『静岡県の横穴式石室』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 『森町円田丘陵の横穴墓群』
- 静岡考古館 1962 『駿河丸山古墳』
- 静岡市教育委員会 1984 『佐渡山 2 号墳発掘調査報告書』
- 1986 『駿河 楠ヶ沢古墳群』
- 島田市教育委員会 1978 『鶴田 1 号墳・2 号墳 法信寺 1 号墳』
- 2010 『市内遺跡発掘調査報告書』
- 清水市教育委員会 2002 『神明山第 4 号墳発掘調査報告書』

白石太一郎 1975 「ことどわたし考 - 横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって - 」「『橿原考古学研究所論集』創立 35 周年記念 吉川弘文館

白澤 崇

1998a 「組成からみた古墳主体部の副葬土器 - 静岡県三重県の事例を中心に - 」「『網干善教先生古希記念 考古学論集』上 網干善教先生古希記念論文集刊行会

1998b 「組成からみた古墳主体部の副葬土器 - 2 」「『静岡県 考古学研究』No. 30 静岡県考古学会

鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」「『有玉古窯』浜松市教育委員会

大東町教育委員会 2004 『毛森山横穴群発掘調査報告書』

田村隆太郎 2008 「原分古墳における埋葬と儀礼」「『原分古墳』調査報告編 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

寺前直人

2005 「後期古墳における土器副葬の階層性」「『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団

2006 「ヨモツヘグイ再考 - 古墳における飲食と調理の表象としての土器 - 」「『待兼山論叢』第 40 号史学編 大阪大学大学院文学研究科

2012 「横穴式石室導入前後の古墳における土器組成」「『駒沢史学』77 号 駒沢史学会

豊岡村 1993 『豊岡村史』資料編三考古・民俗

豊岡村教育委員会 1983 『押越・社山古墳群調査報告書』

2000 『大手内古墳群』

奈良県立橿原考古学研究所

1990 『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』

1995 『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』

沼津市教育委員会 1990 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』

浜北市教育委員会 1995 『浜北市高根山古墳群』

浜松市教育委員会

1971 『浜松市半田山古墳群（B 群）調査記録Ⅱ』

1985 『蜷塚遺跡Ⅴ・Ⅵ』

1988 『半田山古墳群（Ⅳ中支群 - 浜松医科大学内 - ）』

1995 『浜松市指定文化財 - 古墳 - 』

土生田純之 1998 『黄泉国の成立』学生社

袋井市教育委員会

1978 『山本山古墳群』

1987 『大門大塚古墳』

1992 『団子塚古墳群 - 遺構編 - 』

1997 『八幡山横穴群』

2004 『地藏ヶ谷古墳群・横穴群Ⅰ・Ⅱ』

2013 『団子塚古墳群H - 1 号墳発掘調査概報』

藤枝市 2007 『藤枝市史』資料編 1 考古

藤枝市教育委員会他 1980 『原古墳群白砂ヶ谷支群』

1981 『原古墳群谷稲葉支群高草地区』

藤原 学 1985 「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」「『末永先生米寿記念献呈論文集』乾 末永先生米寿記念会

古屋紀之 2011 「土器と土製品の古墳祭祀」「『古墳時代の研究』3 墳墓構造と葬送祭祀 同成社

前田 健 2007 「古墳出土須恵器からみた須恵器の使用者と生産者 - 静岡平野の事例分析から - 」「『静岡県考古学研究』No. 39 静岡県考古学会

三島市教育委員会 2000 『夏梅木遺跡群』

三原翔吾 2013 「若狭・越前地域における古墳出土須恵器」「『駒沢考古』第 38 号 駒沢大学考古学研究室

森町 1998 『森町史』資料編一考古

森本 徹 2007 「横穴式石室と葬送儀礼」「『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会

図・写真出典

図 1 藤ノ木（奈良橿考研 1990・1995）

図 3 賤機山（静岡県考古学会 2003、前田 2007）、駿河丸山（静岡考古館 1962）、神明山 4 号（清水市教委 2002）、楠ヶ沢 3 号（静岡市教委 1986）

図 4 夏梅木 9 号（三島市教委 2000）、原分（静岡文研 2008a）、清水柳北 3 号（沼津市教委 1990）、谷津原 6 号（静岡文研 2001）、八幡 2 号（藤枝市 2007）、鶴田 1 号（島田市教委 1978）、宮裏 6 号（島田市教委 2010）、高草 24 号（藤枝市教委 1981）、白砂ヶ谷 C 1 号（藤枝市教委 1980）

図 5 宇洞ヶ谷（静岡県教委 1971）、堀ノ内 13 号（掛川市 1997・2000）、茶屋辻 A 13 号（掛川市教委 2003）、本村 A 1 号（静岡県教委 1968）、欠下峠 B 1 号（大東町教委 2004）、宇藤 A 9 号（菊川町教委 1996）、小堤山 2 号（相良町教委 1999）、稲荷山（静岡県教委 1966）

図 6 山本山 4 号（袋井市教委 1978）、団子塚 H 1 号（袋井市教委 2013）、団子塚 6 号（袋井市教委 1992）、北山 2 号（浅羽町教委 1987）、地藏ヶ谷 27 号（袋井市教委 2004）、八幡山 2 号（袋井市教委 1997）、院内 3 号（森町 1998）、林 5 号（静岡文研 2008b）、天王ヶ谷 17 号（静岡県埋文 2012）、権現山 1 号（静岡県教委 2001）、新林 1 号（豊岡村 1993）、大手内 A 7 号（豊岡村教委 2000）、押越（豊岡村教委 1983）

図 7 蛭子森（浜松市教委 1995）、宇藤坂（浜松市文協 1998）、蜷塚 3 号（浜松市教委 1985）、高根山 A 13 号（浜北市教委 1995）、神明平 1 号（川江 1997）、半田山 B 7 号（浜松市教委 1971）